

同人誌 (2016年11月号)

# 風狂

風狂の会

詩

山みちを歩く	中平 耀
夢	金 得永
月 兎	原 詩夏至
道灌の予言	出雲 筑三
新宿支部 敬老会	高 裕香
五感を思考する人へ	高村 昌憲
正しい子供たち	なべくら ますみ

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十二）	三浦 逸雄
-------------	-------

評論

雑誌の座談会から（二）	北岡 善寿
詩人・作詞家・西條八十（三）	神宮 清志

翻訳

アラン『わが思索のあと』（二十八）	高村 昌憲 訳
-------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

数年前に私たちの移り住んだ住まひは  
都心から遠く離れた丘陵地帯の山の上にある。  
四十数年前に開発されたといふ古い團地だ。  
夏は濃い緑の林にかこまれ、  
頭上には都會にはない廣大な空もある。

山みちのへりには  
公園がわりの小さな空き地も眠っている。  
散歩の途中深閑としたそこで一休みするのが  
いつもの私の習はしだ。  
往年の子供たちの歓聲を空耳に聞く。

みちの両側には  
タンポポ以外は名も知れぬ野の花が咲く。  
頭上には奇ッ怪な鳥の啼き交はず聲がする。

山の斜面の向うには麓の町。  
小さな家々が野づらに張り付いてゐるのが見える。  
昔はのどかな田んぼや畑だつただらうに。

それらを何思ふでもなく眺めるわが身を  
戯れに山上の仙人になぞらへてみるのも一興だが、  
俗塵にまみれたこの身は  
所詮道ばたに咲く無心の花には及ばない。

野の花はそれぞれに安んじてそこにある。  
さう観念して今日もまた山みちを歩く。

夢が好きで  
子供のころから夢ばかり  
風に乗り 波をかきわけ  
子供たちと四十年

夢見る子供が好きで  
生涯を 夢見て歩いた  
いまや夢の中の人生も夢見たから  
山をおりる時が来たようだ

夢を越え 風に乗り  
雲になったまま  
雨が降り 雪が降っても  
無言の夢を見る

夢の中に生きて  
落日の夕焼けに  
燃え残る余韻

日々の夢の中で  
子供たちの明るい微笑が  
花開いては散る日常

夢の中の夢が  
寒風の中の松柏となって  
黄昏の夕焼けを眺める

生の中の生が  
小さな響き  
大きな笹

\* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

月にいるのは  
あれは兎ではないのです。  
月にいるのは  
あれは 兎の影。

この世をば  
わが世とぞ思う  
権力者の  
欠けたることもない  
月面から  
その輝く懐から  
出奔して――

今も 兎は  
逃げているのです  
今も 兎は  
走っているのです  
その  
いつ果てるともない  
一途な拒否。

月にいるのは  
あれは兎ではないのです。  
月にいるのは  
あれは 兎の影。

月を抉った  
兎の〈非在〉の影。

ここは糟屋城ではございません  
丸山城と呼んでおります  
道灌さまのお墓は城外に二か所あります

あの方は強すぎました  
何せ豊島氏の石神井城を陥落し  
江戸と河越城の整備も急がれていました

いつ覚えたのか和歌にも優れ  
里山の花も鳥のように愛で  
武蔵野を駆けめぐる姿はあこがれでした

自分より力量が上回る部下は  
お館さまにはありがたくも心配  
猜疑心が生まれたのは判ります

あの方はここでお館に謀殺された時  
「当方滅亡」と絶句し  
主家の命運は予言どおりになった

「どうだね、君が手に負えないと  
思う者だけ採用してみるかね」  
本田宗一郎がお館だったら良かったんですが

漁夫の利を得たのは弱小だった北条  
広大な糟屋城は流転の始まりでしょうか  
いいえここは丸山城でございます

僕は九〇歳を越えた  
同国の人との交わりは  
母の懐にいるようだ

敬老会を祝おうと  
東京韓国学校の女生徒が踊りと歌を振る舞う  
あの子は 初恋の子ではないだろうか？

アリラン アリラン アラリヨ  
のびやかにのびた指先が天を  
くるりと足先が地を目指す

クンタッタ クンタッタ たいこのリズムが  
熱い血潮となり  
眠ってい魂を呼び起こす

僕らは太陽の子 光の子であった  
その光が 駆け巡り  
キミと出逢ったのだ

わが民族の子 太陽の子よ  
どこで生きようと  
地に光をもたらせ！



見ることは無限に似て最も広い  
遙か遠い星々も感知できる視覚  
両眼で感じる距離は観念に近い  
見たものは証拠にもできる感覚

聞くことも自分を越えた訪問者  
目に見えない小鳥の声も訪れる  
耳で感受する音は言葉の創造者  
文字よりも初めにあった恋の春

嗅ぐことは自らの周辺に限られ  
儂い曖昧な証拠でしかなくても  
現の時間を越えた想像力の群れ  
嗅覚はやがて予感する味覚の友

触れることができる範囲は狭い  
親密な関係と運命が待っている  
触れることで自覚するのは外界  
自分の愛と他者の愛を証明する

味わうことができる処は内省的  
全ては口と歯と舌で開始される  
日々の肉体を養うことへの歓喜  
味覚は五つの味の化学者になる

仕事に向かう朝

少し陽は高くなったけど.....

公園の中を突っ切るいつもの近道

珍しく砂場で遊ぶ兄弟らしい二人組

親の姿はない

思わず声を掛けてしまった

おっ早よ～～

おにいちゃんが無言のまま ちらりと顔を上げる

おとうとが この人だあれ という雰囲気

黙って おにいちゃんに顔を向けると

おにいちゃんは こんな人知らないよとばかり

目をそらし首を振る

思わぬ肩すかしを喰ってしまった私

しかし この子供たちはとっても素直ないい子供たち

知らない人と やたらしゃべっていけない という

親や先生方の言いつけをきっちり守ったんだろう

昨日はいつも見かける女の子に

お早ようございま～す と声を掛けた

やはり その子からの返事はなく

無視されてしまった様子

仕方ない この子供たちは本当にまじめな良い子供たち

今朝も集団登校の子供たちが集まる時間

そこを黙って通り過ぎようとした時

女の子がランドセルの肩紐に手をやり

ていねいなおじぎをしながら

おはようございます としっかり挨拶をしてくれた

昨日声をかけた女の子

私のことを思い出してくれたようだ

うれしい一日の始まり



三浦逸雄 「室に立つ女」30号（油彩）



三浦逸雄「夜の室」20号（油彩）

わが憲法は、日本の内側にできるだけ戦争の原因をつくりださないようにし、外側の戦争にできるだけひきこまれないようにし、国際平和を保証する活動にできるだけ努力をふりむけることを命じている。そして、憲法は政府の国策行動を支配する規範であるから、そう命じられているのは、だれよりもまず、政府当局である。憲法は、構造的に平和とともにたち、平和とともにたおれるのである。国内の最高法規であるうえに、国連憲章のような国際条約をかさねあわせる構造の憲法をもつことは、われわれ国民のほこりである。それは全人類の国家活動の明日を指し示す規範でもある。

今日までの人類の歴史、とくに近代の歴史は、戦争が常態であり、平和はかえって例外であった。そういえるほど、戦争のくり返しになやまされた。国家活動の目標と方向を調整しなおさなければ、明日の歴史もまたそうであるかもしれず、原水爆の使用は、人類を破滅さすかもしれない。

憲法の志向する平和は、このような危険な状況の中での平和であるから、もちろん、将来の空想的平和ではありえない。現在から明日へむけての現実的平和であり、この平和を実現する方法をふくむのである。

（久野収 「安全の論理と平和の論理」、『憲法読本 下』）

論者はこの文章を、「アジテーションの傾向を持つ文体が、その一途さゆえの猪突猛進的な威嚇性を脱し、より多面的になって、或る種の「かるみ」を文章の上に醸し出すように見える例です」と言う。文体の分析はともかく、憲法の見解には説得力がある。その骨子は、「憲法は政府の国策行動を支配する規範であるから、そう命じられているのは、だれよりもまず、政府当局である」というところである。ところが、その政府が支配の規範を越えて、安保法制なるものを作ってしまったのである。憲法改正を目指す政権の機を見ての行動と言ってよい。北朝鮮の核の脅威、尖閣諸島を巡る中国との対立といった国防の危機が目に見える形で浮上して来たのが、改正を後押しする重要なモメントである。ここに出した久野氏の見解の最後の二行は、憲法改正を目指す側には、都合のよい将来展望といえるものであろう。

「このような危険な状況の中での平和であるから、もちろん、将来の空想的平和ではありえない。現在から明日に向けての現実的な平和であり、この平和を実現する方法をふくむのである」

憲法改正が現実のものになるかどうかは、国民投票の結果次第だが、改正が実現した場合、最大の眼目は9条である。軍備は既に出来ているので、戦争が可能になった時、考えて置かなくてはならないことは、戦後の問題である。先の大戦の結果はどうであったか。「シグノ」の文体解剖の試みは、そのことを問題にしているのではない。論者は『「書き込み」の文体と稠密な「論理の相」』という項目で、家永三郎氏の文章を出しているのである。長い引用だが、今日に於て

も無駄とは言えない内容である。

過去に生じた「戦争の惨禍」は、それが人間の生命と心身とに与えたものについては、永遠に回復できず、その責任を、加害者の処罰や加害者の物質的賠償によって償わせたとしても、失われた生命や傷つけられた心身を元通りにすることの永久に不可能な以上、もっとも有意義な償いは、将来における「惨禍」の再現を阻止する責務を達成することにあると考えざるをえない。その目的を果たす努力こそが戦争責任を自覚するものにとって、最高の償いとなるものと信ずる。ただし、人間の力は有限であるから、どれほど誠実かつ全力を傾けても、必ず目的を達成できるとは限らない。不幸にして核戦争を阻止できず、もはやその「惨禍」を惹き起こした責任を問うものも問われるものも地上に存在しない状況が現出しないという保障はない。それにもかかわらず、人が人であるかぎり、相対有限のなかでなすべきことをなすことによって相対有限の世界にありながら絶対無限の世界に超出し、時間を超えた永遠の生命を獲得することができるのである。それは形式論理では解くことのできないパラドックスであるけれど、人之人たるゆえんは、そのようなパラドックスの内にのみ生きるほかないところにある。というのは、ありのままに人の生き方を直視したときに明らかに見えてくる事実（Sache）である。戦争責任は、単なる相対有限の人と人との間で生ずる責任にとどまらず、相対有限の人が絶対無限のなるもの（ここでは有神論に立つ「神」に限定して考える必要はない）に対する責任でもあるのである。最悪の事態を想定しても、戦争責任を償うための努力が無に終わることはないとの確信に立ち、そして最悪の事態を回避する選択肢が現に存在する今日、その選択肢を選ぶことを誤らないように、もっとも理性的かつ良心的に努力することが、戦争責任を償おうとするものものとするべき唯一の道として私たちの前に開かれているのである。（家永三郎『戦争責任』）

この文についての論者の感想はこうである。

「見ると読むのに骨が折れそうな文章です。さらりと読み流す、というわけにはゆかない。けれども、すこし落ち着いて読んでみれば私はいへん分かりやすい文章であると思います。それは論理的に飛躍がない、ということに加えて、思考においてゴマカシがないからです」

憲法改正だの戦争責任だのといった議論に頭をひねっていると、デッドロックに乗り上げているような気分だから、この辺で読んで肩の凝らない、それこそさらりと読み流せる文章が文体解剖の試みの資料として出してあるので、それを転記して見よう。

「金は水より高い？ 茨城・栃原金山 社運かけ地下水販売へ 価格低迷し、金では赤字」という見出しで、「海行かば水漬く屍」で有名な万葉時代の金山とは大いに趣を異にする現代の奇談というべき内容である。

本州でただひとつ金の採掘を続けていた茨城県太子町根「栃原金山」を経営する東洋金属鉱業（東京都千代田区）が、坑内から出る水を今春から大々的に売りだす準備を進めている。本業

の金価格低迷で掘り出した金鉱石はそのまま袋詰めにして坑内に保管せざるを得ない状況が続いており、水販売に社運をかける。東洋金属鉱業は、十一年前に栃原金山の採掘権を取得。ところが開発当初一g五千円を超えていた金価格は下がり続け、金鉱石の出荷を始めた七年前には千五百円前後、いまは千円台前半に低迷。「出荷すればするだけ赤字になる」（津久井次長）状態という。結局、出荷したのはわずか三年間。その後は、金価格が三千円くらいに上がったなら出荷しようと、金鉱石は袋に詰めて坑内に積み上げている。細々と続けていた採掘も昨年夏から、一時見合わせている。同社は鉱山生き残りに、坑内見学や砂金取りに体験からくる観光収入に重点を移し、年間六万人が訪れる。三年前から、地下の坑道にたまる水を「金山水」として、一・五l三百六十円で金山内の売店に土産品として並べている。水は一日百二十tで、金山水を除いて排水している。現在は、毎月ペットボトル二千本分を生産しているが、業者委託のためコストがかさむ。直営工場を建設して、月十万一十五万本を生産、全国的に売り出すことにした。津久井次長は「観光とミネラルウォーターとの三本柱にする」。採算が合うようになればいつでも金採掘を再開する構えだ。日本ミネラルウォーター協会（東京都）によると、売れ行きは、成分の違いより消費者の好みに左右される面が大きい。「金鉱山の水」には神秘的な響きがあり、受け入れられる可能性はありそうだという。（朝日新聞 一九九八年一月六日火曜日 朝刊二十九面）

これは情報としての新聞記事だから、客観的に書いていけば、文章として及第ということになる。それにしても、一g五千円の金が千円台前後まで下落するとは、腑に落ちない話で、金利マイナス2%に何処かで繋がりそうに思えるほどだ。水が金より高くなる時代が来ないとは限るまい。

この他、「文体解剖の試みと困難」には、渡辺一夫、宮澤賢治、森有正、和辻哲郎等の文章も解剖の対象として取り上げられているが、長くなるので割愛し、広告文でも論文でも新聞記事でもない、滅多にお目にかかれそうもない文章を転記して、不本意ながらこの稿の終りとしたい。

### 勉強まで熱が入った言語障害になるほどの初恋時代

三年生になって、クラスの編成が変わった。また悪いことしなきゃまずいなと思って、頑張った。あっちこっちにワル仲間がいるし、「オー」「おう矢沢、また一緒だな」みたいな感じで、よしこのクラスもまたオレのもんだ。ランラランってやっていた。席について、先生がなかなか来なくてシビレきらして待ってたんだ。「もう帰るぞ」とか思って、組替えの日ね。斜めうしろ見たのね。パッと見て…。それが、やっぱり初恋だったのよ。パッと見て、ガバーツとなったもの。マジにさ、ガタツとなった。「わあ、マツブイじゃん！！」それで前向いて、うわあって感じ、まわりのやつは、そんな気持ち知らないから、相変わらず「帰ろうぜ」すべった転んだワーワーやってる。「おい、ちょっと静かにしようぜ。今井、静かにせい」ワルの元締の矢沢が言うわけ。どうしたのかって感じよ。それから、ちよくちよく見だした。斜めうしろ、五人くらい向こうにいる。角度的にバッチリよ。顔が見える。（\*）まったく、その女とは話もできなかったな。オレ、もう言語障害。しゃべりたいのよ。むこうも、雰囲気的には待ってるわけ。



それでも、「あの、ななな...な、な」「な、なんとかだけど...」「えっ?」「えっ?」て言われた途端にガクンよ。その一言。えっという一発がシブイわけ。あの声が、あの声がエコーかかって、またキューンと。バキューンっていう感じだから。（\*）年賀状なんか来たよ。オレ、読んだ。「なんとかなんとかで、弱っちゃった。困っちゃったの」「の」が最後についてる。ワオー！広島に「の」とかつける女いないわけ。わしら、オンドリヤーとやってる中でさ、「困っちゃったの」ってあった時は、もう、メジャーって感じした。

（矢沢永吉『矢沢永吉激論集・成り上がり』糸井重里構成・文）

（了）

## 清らかな貧乏なんて

西條八十は流行歌があまりに有名なので、それが本命と思われがちだが、それは全くの誤解である。彼の作品の中では、流行歌はその一部に過ぎない。図書館でその全集を手にとって、見ているうちに寒気がしてきた。その作のあまりの多さに、ただ驚くばかりだった。ずっしりと重い分厚い七百ページもある本が、なんと十七巻もあるのだ。ほかに別冊が一巻ある。そのなかで詩集が四巻、童謡が二巻、訳詩が一巻、歌謡・民謡・社歌・校歌が三巻、童話、少女小説、ランボウ研究が各一巻、小説・随筆が二巻その他となっている。つまり歌謡・民謡・社歌・校歌は全体の一七分の三に過ぎないのである。

「ラマルティエヌの言い草ではないが、ぼくは生れつき、詩や唄なんて『呼吸するごとく』楽に書く」

これは『女妖記』のなかで書いている言葉である。「呼吸するごとく楽に書く」とは驚くべき言葉だ。とはいえ、これは多分に都会人のダンディズムがあると思う。相当な努力をしても、素知らぬ顔をするのが彼らのカッコよさなのだ。じっさいには唄を作るために、古代から近代まで歌謡を研究しているし、準備はとことんやっている。しかし西條八十の詩とか唄には、呼吸するように出来てしまった、という感じがある。詩ばかりではない。散文でも同じで、読みだすとすいすい読めてしまって、その心地よさは独特のものがある。いかにも浮き浮きと楽しく書いていると思わせる。あの大部の全集が読みだすとどんどん読めてしまって、つい先を読みたくなくなって置けなくなってしまう。

八十の生き方そのものにも、苦渋に満ちたといった気配がない。羨ましいような楽しい人生を送ったかに見える。たぶんそうなのだろうけれど、カネについてはそれほど楽には進まなかったようだ。誰でもカネとの付き合いは、避けることのできない難問である。カネとの対処の仕方、その人のほんとうの実態が見えてくるものなので、この問題を少し追求してみたい。

株式相場で大勝ちしたけれど、暴落にあってその資産のほとんどを失った。天ぷら屋になりして、貧乏生活もしたが、やがて作詞家という道が開けた。歴史的な大ヒットとなった「東京行進曲」を書いたとき、作曲した中山晋平は中野の広大な敷地に豪邸を建て、唄った佐藤千夜子はイタリアへ留学してしまった。そのいっぽうで西條が得たのは三十円に過ぎず、ご褒美として電気蓄音機を貰っただけだった、ということはすでに書いた。作詞家に対するこの冷遇に、西條八十は腹を立てた。作曲というのは誰にでも出来るものではなく、よほど特殊な才能が必要であり、いい声で歌うのも選ばれた者にしか出来ない。これに対して、作詞は皆が使っている普通の言葉を組み合わせるだけで、それほど高度なものではないという観念が、レコード会社には抜きがたくあった。

「東京行進曲」を作ったときは、八十はまだ契約もしていないし、社員でもなかったからとは

いえ、この差別はあまりに大きすぎるのではないか。まもなくビクターと契約して正式社員となったものの、その印税は中山晋平が五銭だったのに対し、西條八十は二銭五厘と晋平の半額だった。散々ごねたけれど会社は首を縦に振らなかった。しだいに西條の人気があがり、ヒットを次々と飛ばすようになって、次の契約更改で三銭にするのがやっとだった。

その次の契約更改のとき西條は粘りに粘って交渉を重ねたが、印税の値上げは認められず、その代わりとして会社側が出してきた条件が妙なものだった。ビクター以外の会社からも、作詞依頼を受けてよいというものである。その結果コロムビアにいた古賀政男と組んで出来たのが「サーカスの唄」であった。そのコロムビアから印税六銭にするからという好条件で、入社を誘いを受けた。これを親友であった中山晋平に相談し、ビクターとも話し合ったが、さらにコロムビアから十万円のプレミアムを付けるという条件が追加されて、結局コロムビアへ移ることになった。戦時下に作った「旅の夜風」は百三十万枚を売り上げているので、八万円あまりの印税収入になっている。

この辺ではとりあえず八十も納得できただろう。ところが敗戦となって、収入の道が一時期絶たれ、妻が洋服を売り歩くということになったとき、巷では八十の唄の大洪水だった。なのに八十のところには一銭も入ってこない。唄の使用料を支払うように働きかけることを、音楽著作権協会はしていない、これでは意味がないと脱退を決意して、その話をしに行った。すると逆に説得されて、協会の会長を引き受けてくれないかということになって、ついにそれを引き受けてしまった。

八十は少年の日、国木田独歩の盛大な葬儀に参列した。だがその直後、残された治子夫人が、生活苦のために生命保険の勧誘員になったことを聞いた。花やかな文壇人の遺族の生活が、いかに悲惨なものか、大学の教授も同じで、学者たるものの死後のいかに惨めなるか、これまたつくづく思い知らされていた。そして『私の履歴書』のなかで次のように書く。

「シューベルトが死んだとき、その全著作権は、たしか日本金で五百円くらいで商人に買われてしまった。詩人ボードレーが、死期近くに自分の生涯の収入を数えてみたとき、それはたしか一万五千フラン弱だった。ひとはこれらを清貧と呼ぶが、冗談じゃない。世の中に清らかな貧乏なんてあるもんじゃない。およそ貧乏はみんな汚いものだ。清貧なんて言葉は、資本家が芸術家を搾取するためにつくった言葉だ。芸術家だって人間だ。人間らしく生活する権利があるのだ。それに家族をどうする。愛する家族に窮乏の苦を味わわせるくらいなら、最初から結婚しない方がいい。その点独身で通した永井荷風は立派だった」

なんと力強い文章だろう。わたしはこの文を読んだとき、心から西條八十を尊敬する気になった。「世の中に清らかな貧乏なんてあるもんじゃない。およそ貧乏はみんな汚いものだ」という一句には、目からうろこが落ち、心底から共感した。以後この言葉をエッセーの中で、自分の言葉として何度も使わせていただいた。八十は自分のためばかりでなく、作詞家全体のために、作詞料のアップのために戦おうという信念があった。八十には弟子も多かったが、そうした後輩の作詞家のためにも、人に何と言われようと徹底的に戦った。とかくカネにこだわることを潔し

としない風潮があり、この問題から逃げようとする者が多い中で、これだけ敢然と真っ向から取り組んだ姿勢には頭が下がる。

音楽著作権協会の会長としてヨーロッパに行き、CISAC(シザック)(作詞作曲家協会国際連合)の会議に臨んだとき、西條はフランス語が話せるので便利だったし、歓迎もされた。そこで各国代表から諤々たる非難を浴びた。

「われらの国では貴国の歌曲をレコード放送に使用しても、必ず、その使用料を貴国に送付している。然るに、貴国では自国の歌曲以上に、われらのそれを多く使用しているのに、一文の送金無きは如何。われら文化国家としての日本の信義を疑い、併せて貴協会の努力の不足を糾弾する」というのであった。(『私の履歴書』)

明治三二年に制定された著作権法三〇条一項八号に、歌曲のレコードは、たとえそれが商売用に使っても、作家に対し、一文も報酬を払わないでよいとされている。これを世界無類の悪法と断じ、民放各社は豚のように肥え太り、作家は窮乏させられている、と西條は憤激し、断固としてこの問題を解決することを決意した。

国際会議から帰国後、文部大臣にこの事情を陳情し、文部省および衆議院の文教委員に、説明し懇請した。九年以上にわたる音楽著作権協会の会長としての職責は、ある程度明るいものが見えてきたとき、妻の晴子が亡くなった。しかし八十はテレビ、ラジオの歌曲使用料改正、映画音楽の使用料徴収などに関し、各放送局の委員と忙しく交渉中だったので、ほとんど側について看護することができなかった。その葬儀の日に「思いがけなく北原白秋未亡人や、橋本国彦未亡人などが見えて、芸術家遺族に対する協会の功労を讃えられたのは、ぼくの心をいささか慰撫するものだった」(『私の履歴書』)

西條八十という人には、いつも弱者とか最下層の人への視線があった。こうした功績は評価もされていないばかりか、ほとんど知られてもいない。

詩人が貧乏で不幸だったりすると、その人気が高まる傾向がある。しかしそれは本物ではないと主張し、『萩原朔太郎回想』のなかで次のように書いている。

「詩人といふものは妙なもので、夙く死んだり、不幸だつたり、貧乏だつたりすると、若い人たちの人気を克ち獲るやうだ。朔太郎に於てもその生活の荒寥さが幾分かれの声明に参加してゐるごとく、わたしには考へられる。しかし、わたしはかういう原因から来る人気は決して詩人の名誉だとは思はない。「清貧」といふ体裁のいい言葉の蔭には、しばしば暗黒や無思慮が潜んでいる。ポエトといふ言葉がコミックな連想を伴ふ西欧風の誤謬はここから生じる。特にこれからの我国の詩人はもつとも豊かな生活、幸福な家庭を持つデモクラティックな権利を十分主張すべきだとわたしは思う。すこしでも憐憫や同情などによる人気は、その詩人にとってむしろ唾棄すべき侮蔑である」

芸術は不幸の所産と多くの人々考える。貧困だつたり、病気だつたり、狂気をもっていたりという情報があると、人気いや増す傾向がある。じっさいにそんな人が近くに居ると、軽侮し、疎外するけれど。芸術家といえども、経済的にも家庭的にも豊かでよいという主張の、これは珍し

い一例になると思う。「清貧」という言葉が芸術家に被せられることが少なくないけれど、そこにはしばしば暗黒や無思慮が潜んでいる、という指摘は鋭い。

こうした確固たる哲学をもって戦った経済への取り組みには、拍手を送りたい。八十はすべての作詞家・作曲家とその遺族に、著作権料という形で潤いをもたらした。このことは、より大きな評価を得て当然のはずだが、ほとんど知られてもいない。

あの手この手の思案を胸に

八十の妻晴子が亡くなったのは、昭和三五年六月一日のこと、脳軟化症で二か月の入院療養後であった。

「ぼくにとって、実に四三年間の伴侶だった。純情で、貞淑で、ほうらつの無慚の良人を、慈母のごとく守り育ててくれた典型的な日本妻だった」と『我愛の記』に書いている。時に八十が六八歳だった。西條家の代々の墓は、赤坂の丘の上にあった。晴子がまだ若いとき、一人の妹が夭折して、その傍に葬られたいといっただので、その隣に二〇坪の土地を買った。千葉県松戸市に近い八柱霊園という都営の墓地である。そして『我愛の記』に次のように書く。

ぼくはそこに『亡妻頌』と題してつぎのような詩碑を建てるつもりだった。

我妻にして また我母  
また 我恩人なりしひと ここに眠る  
黒髪よ 美しき眼よ  
その海のごとき大いなるころよ  
ああ わが亡きあと  
誰びとか  
この稀なる女人を思い出でんや

だが、その後気が変わって、次のような詩句を書き、自分もともどもそこに葬られる決意をした。

われらふたり楽しくここに眠る  
はなればなれに生まれ めぐりあい  
短き時を愛に生きしふたり  
悲しく別れたれど また ここに  
こころとなりて とこしえに 寄り添い眠る

「ほうらつの無慚の良人」と自ら書くように、八十はお行儀のいい良人ではなかった。斎藤憐は『ジャズで踊ってリキュールで更けて』の中で、次のように書く。

「次々に女に惚れては同棲したり結婚したり、修羅場の中で別れてもまた誰かに惚れる懲りない男を、性格破綻者という。北原白秋、野口雨情、のちに登場する菊田一夫がこのタイプ。

賢い女をカミサンにし、自分の城を固めといて、ビフテキの後はアイスクリームと、取っ換え引っ換えアバンチュールを楽しむ女の敵を、不良という」

斎藤憐は一九九九年に『昭和不良伝―越境する女たち篇』を岩波書店から刊行している。ここで取り上げられているのは、藤蔭静枝、石垣綾子、森三千代、佐藤千夜子、岡田嘉子という面々である。世間で見ると不良というマイナスイメージで見ると、不良にひとつの存在価値を見ている。それだけでなく、もう一つ尊敬すべき人間的価値を見ている。西條八十についても、その見方は同じであろう。

そうした西條八十をしっかりと支えた晴子は、まさに八十が書いたとおりの聖女であり、慈母に違いない。それもいつも明るく、おおらかに接していた。あるとき一家が軽井沢に避暑に行っているとき、たまたま民謡の仕事でその近くに行く汽車の中で、晴子と出会ったことがあった。前の座席に座っている夫人が新聞で顔を隠して、しばらくしてから「イナイ、イナイ、バア」のように新聞を下して顔を出した。何故そんなことを、と問うと晴子は答えた。

「あなたのことだから、若い女が隣に来るのかと思って顔を隠していたのよ」

これには八十も笑いだしてしまった、と楽しそうに書いている。（『我愛の記』）

晴子にしてみれば、小料理屋の娘がたまたま八十に見初められて、妻となった。良人は天ぷら屋から早稲田大学の教授となり、有名な詩人・作詞家となり、その稼ぎはすべて晴子の手中にあった。八十は安心して資産の管理を任せていたので、次々と邸宅を買い替え、最後には成城に広大な庭のあるお屋敷を買って住んだ。そして何よりも優秀な子供たちに恵まれ、詩人・三井嫩子、理学博士・西條八束を育てた。全体的には花も実もある、誇りに満ちた生涯だったと思われる。

八十は妻の死に臨んで、音楽著作権協会の仕事で飛び回っていて、看病ができなかったことを悔いた。亡くなった妻の存在の大きさに今さらながら思い至り、ランボウの研究をまとめる長大な論文の執筆に心血を注いだ。妻の墓前に捧げようと、その完成をめざしたのである。多くの遊び人がそうであるように、八十も妻の死後、待合に通うこともなくなった。とてもそんな気になれなかったのである。

昭和三六年、音楽著作権協会の会長として、スイスへ会議に行ったり、ライフワークのランボウ研究に没頭しているとき、レコード会社から新人歌手を売り込むための唄を依頼された。久しぶりの流行歌の作詩だった。娘の嫩子に猛反対され、くだらない歌謡曲で残り少ない人生を無駄にしないで、フランス文学の功績を残して欲しいと懇願された。しかしそのくだらない歌謡曲を

六九歳の八十は書いた。

「吹けば飛ぶよな将棋の駒に、かけた命を笑わば笑え」

船村徹の作曲でこの「王将」は三十万枚売上げ、村田英雄をスターダムに押し上げた。『百科事典』に流行歌以外見るべきものはない、と書かれた八十の人生を「吹けば飛ぶよな」と自嘲したのだ。誰も知らないけれど、俺のことはあのお月様だけが知っている、この発想に庶民はぐっと参ってしまう。「愚痴も言わずに女房の小春」とは、ひたすら苦勞し、耐えて死んでいった妻・晴子のことだ。「破れ長屋で今年も暮れた」胸に深く染み込んでくるこの歌詞。戦前書いた「とんぼ返りで今年も暮れて」と対を成す殺し文句である。

この唄に心惹かれたのは、庶民ばかりではなかった。なんと西脇順三郎がお気に入りだった。安東伸介の家に来ると、「王将」のレコードを七、八回くらい立て続けに聴くのが常だったとは、北岡善寿氏のエッセー集『つれづれの記』の中の「浮かぬ話」にある。手元にある『西條八十童謡全集』の付録の小冊子に西脇が一文を寄せていて、童謡「かなりや」を称賛し、最後のところで「王将」を称賛している。ほかの筆者が童謡だけを取り上げているのに、あえて「王将」を取り上げているのは、よほどお気に入りだったに違いない。

随筆作品としては『女妖記』『唄の自叙伝』『我愛の記』『私の履歴書』などを書いた。どれも面白いが「中央公論」に連載された『女妖記』は注目される。女たちとの交友の記を、妻の死後に書いた。堅気の女性を書くに支障があるということで、もっぱら芸者との交流を描いた。それでも相手は八十よりもはるかに若いのだから、その時はまだ現役で活躍中であり、迷惑が掛からないようにと気を遣って、肝心のところはほとんど書いていない。それでも男女の機微は微妙にして、海より深い。そのへんを八十ならではの流麗な描写で綴られると、なかなか読み応えがある。村松梢風の『女経』を思い出させるが、村松作品ほどに重くなく、深刻でもない。軽妙洒脱であり、それでいて深みがある。(つづく)

## 唯物論

何事にも時期があります。確かに私は、ありの儘の勇気を私自身で訓練したり、生徒たちに訓練させたいと望みましたが、有名な〈方法〉へも同様に自発的に戻りましたし、ついにその経帷子をすっかり引っ張り上げました。本当のところ、それらは自由や手に入れた明証の規則です。決して忍従する明証ではありません。ご存知のようにデカルトは、フェルマやロベルヴァルたち(1)が楽しんでいて、数学における偶然の研究が好きではありませんでした。デカルトは、こっそり盗んだようなこれらの真実を軽蔑していました。ライプニッツが、幸運な試みでしかなかった記号の運用によって上手く解釈した時、ライプニッツは自分の精神同様に両手からも来たこの好運に満足し、自慢さえもして高く評価したのです。この流儀は今では勝ち誇っています。デカルトは反対に習慣や機械論によって身を守りました。デカルトの『精神指導の規則』からは、そのことが良く分かります。そこではデカルトの研究をより良く秩序立てるのを目指して、簡潔で疑義が生じない認識に戻っていますし、彼だけの意志に基づいてそれらを守っていることを理解して下さい。そこから私もこの自由の先生に感動で一杯になって、最も良く知っていたものに自我を戻しました。そして少なくとも私は、新しい証明をしなければなりません。真理の友たちには恐らく奇妙と思われるこの精神の歩みは、何時も私を留めていましたが、私は真理の貯えを増やさなかったもので、能力という点では利益がありませんでした。しかし私は今ではこのゆっくりとした方法が、精神の教養にとって無益ではなかったと理解しました。結局のところ、数学というものは疑ったり拒絶するところに成立します。始めにそのことが良く分かります。そこでの諸命題は誰にも疑う余地がないのですが、それらは疑うことを主張しています。その意味では人は或る明証を拒否し、別の明証を求めます。

私はメヌ・ド・ビラン(2)に求めたのを思い出します。私は女子生徒たちのために一年間を彼と共に過ごして、全く困難な問題の中でも、この問題に何らかの光明を見出しました。ビランは、盲目の幾何学者がいても少しも驚きませんでした。その上彼は、人がそれに驚くことが不思議だったのです。その理由は、彼には良く分かっていることですが、視覚はありの儘に見て受け取るものを、その儘受け取りますから真理にとっては盲目の感覚です。それに反して触覚は、固体を前にして触れることは望むだけ抵抗の印象を自分に与えます。それは、この著者が視覚は観念論者の感覚であることを述べて説明しているのです。聴覚に関して彼は既に、音声の能力によって前の二つの感覚とは別に分けています。聴覚は私たちに音の世界を創り、私たちによって全てが構成されています。この指摘はビランによれば、述べることでしか生まれない言葉によって語られた視覚と、言葉によって支えられて絶えずその対象を再建する必要性の中にある盲目的触角との間に、大きな相違を生んでいます。それはつまり、真の幾何学者は意志によって自ら



盲目になるということが私には良く分かりました。ここから聞く（entendre）という言葉の素晴らしい意味が、理解力（entendement）という言葉を与えたのです。デカルトやあらゆる数学者に戻ると（というのも彼らは名誉の瞬間と報われない細心さを持っているからです）、真の幾何学の巨匠は、見るものよりも言ったことに多くを拠り所としていて、相当の方法によって任意の対象と一致するよりも、自分自身と一致するのに心を配っていることを私は良く理解しました。でもこの立派な自尊心にも不都合が無い訳ではありません。というのも結局のところ、人間は世界に存在しているのに、世界も人間を忘れることに良くなり得るからです。周知の如く、デカルトは世界へ直進しました。従って純粋数学は、彼の眼には意志の訓練でしかありませんでした。

デカルトが『省察』の中で物質を語るのを適切に工夫して、その後あらゆる威厳を無視してこの観念を勇敢に保持しているのを人が理解する時、それは〈意志〉であると言うのも言い過ぎではありません。そしてこの方法によって、デカルトは本当の世界を発見しました。つまり純粋存在です。従ってその中の全ての人間は、世界が存在していることを知るまで世界は存在しているように見えると独りで言うしかない以上、如何なる哲学者もデカルト以上に非観念論者ではありません。そして肝心なことを要点だけ言えば、デカルトは自由な本質を持つ彼自身の精神との対立を通して、敵対者を決定していたのです。世界は慣性であり、可能な物理学は全てがそこから生じています。私が知った限りでは、何人もの人は岩場の周りの激流に何時も水の渦をうっとり見とれて満足し、この全ての激しい外観は慣性でしかないと言いながら、その時彼は自分が知っていたものを発見したのです。人はそのことを知っています。しかし、それを確かめられるのでしょうか。事物の中に曖昧な魂を仮定したり、まるで実体的偏愛のような観念は、恐らく最も古くて最も根深い誤りです。ルクレティウス自身も一種の意志を原子の中に仮定しました。しかしデカルトは、原子からあらゆる特性とか性質、原子であるというそれすらもすっかり取り除きながら、大きくても小さくても物体は隣接するものから受ける衝撃や刺激によってのみ絶対的になると判断して、その誤りをきっぱりと取り除きました。デカルトの『哲学原理』を読めばお分かりのように、重さを持つ物体にせよ、発光体にせよ、磁石にせよ、如何なる隠れた性質も如何なる種類の魂も、その儘にして置かないように専念します。物理学は最早創り出すのではなく、出来上がっているのです。

その時に私はデカルトの虹を、嵐を前にした人間の憲章と見做すことが好きでした。まさに伝説が語っているのも同じことです。あらゆるものの中で最も困難なことは、伝説を理解することであると私は分かり始めました。それ故に私は、この事例が全ての威光の力を集めているように見えましたし、それはその人間が精神力によって全ての威光の支配者になっているのです。何故なら、最早この虹色の循環よりもこの世で雄弁なものは何もありませんし、これ程思いがけないものも何も無く、激変させられたこの自然の中でこれ以上私たちに似ているものも何も無いからです。風も、この素晴らしい循環を少しも揺らしません。それは循環であり、精神に従うものであり、そして自然なのです。何という契約の徴でしょう。ところでデカルトの精神は、この問題についてのあらゆる好奇心に応えました。それは水滴が一色に見えても、別の角度から見ると別

の色に見えるように、至る所から見るような光の屈折の結果でしかありません。従ってその対象は決して丸くなく、幾何学的でもないし神的でもありません。寧ろ各自が自分の虹を見ているのですから、同じ対象ではありません。しかしながら私は敢えて言いますが、このような考察の後では少し冷静になることが確かに必要です。というのも既に述べたように、全ての対象は、感覚にとっては外見であり、同様に少なくともそれが全てと関係しているのが見分けられるからです。しかし、この悪魔払いには直ぐに効きません。それ故に私は大西洋へ行き、飽きることなく波を見ましたが、それも又存在するものではありません。この厳格な英知の瞬間は、『海辺の対話』に流れていましたが、それは端から端までデカルト的であり、その信仰によれば、いわば他の言葉からもはね返って来ます。私は、〈宇宙〉について知っていることの全てをこの作品に込めました。そして論争を起こすことなく、全てを私は言うことが出来ました。この慎重さは、私を大変に遠くまで導いてくれました。

それ故に私にも、デカルトが行った魂と肉体の分離があります。デカルトは毎朝やり直さなければならなかったと私は推測しますし、毎分であったとも推測します。そして私たちも同じで、それをやり直さなければなりません。というのも何時も私たちが眠りや休息に戻って仕舞う物質の通俗的観念は、最早生命や感情や精神の観念と同様に、物質の観念ではないからです。存在するものは全てがその意味では物質です。一人の医師でしかなかったロックは、物質が思考したとしても何ら障害を見ませんでした。恐らくこの点でデカルトの物質は、絶対的に思考することが出来ないとは人は理解しました。それは、その法則である外部関係によってあらゆる方法による思考も否定します。しかし、ここには何という混乱があるのでしょうか。そうです、それは思考するデイドロですが、罵倒したり、博愛家として涙を流すのも同一の人物なのです。事実なら何でも構わずに確信し、証拠については造作なく、言葉の最悪の意味において平民である、デイドロ程の人物を、恐らく人は見たことがありません。デイドロはドドナの櫛の木のように、神託に還ることしか出来ませんでした。彼は決して修道院も、自分を脱皮する仕事も、良き娘である明証の涙も、理解しませんでした。既に、食べて消化する如く判断して信じる、パリの完全なる小市民でした。どんな時代にもデイドロは沢山いますし、威圧的です。この信じ易くて疑い深く、何にでも好奇心が強く、人類の熱烈な友人である人物には算段があるのを私は知っています。しかし、動物を少し疲れさせるための、何という時間と雄弁なのでしょう。

体系としての唯物論は、本能でしかありません。観念としての唯物論が本物ですが、それが唯一の本物ではありません。少なくとも唯物論が分かるために、人はそれを否定します。それはデカルトが物質そのものを理解出来るとか、あるいは何であろうと理解出来るのがデカルトの物質ではありません。物質とは、慣性と同じ観念であり、あるいは純粋な存在と同じ観念です。この観念を把握するには、多少なりとも禁欲者にならなければなりません。そこから感嘆や矛盾が、私たちの政治の中まで循環します。何故なら、正義を友とする人々は、唯物論者となって自慢していますが、私にはその理由が良く分かるからです。しかし彼らは唯物論者になることで、お金持ちになって人生を楽しむことしか考えないので、非難されることなのでしょう。恐らくそのことは

本当ですが、史的唯物論の全ての結果ではなく、全ては反対です。その上、全く混乱した観念に従って中傷される人々も、同じ理由から彼ら自身がお互いに中傷することが起こるかもしれません。

コントはこの問題について、他の多くの問題同様に私に教えてくれる筈でした。デカルトから出発しながら私は、何が唯物論であったかを知りましたが、何が間違いであったかを知りませんでした。それは漠然としていますが、その言葉が力強く齎していることなのです。ところがコントは、今では人は理解したことですが、唯物論が抽象的概念であると初めて理解したのです。そして私が前にも言ったことですが、抽象から具象への諸科学の順番を整理して（数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学）、各々の科学が次の科学の最初の方法と最初の手段を提供していることに注目しました。それを仮説と言いましょ。各々の科学は、次の科学について一種の暴君を行使する危険があったことを、コントは理解していました。抽象的なものへのこの自負が、唯物論そのものです。そしてコントは言っていますが、幾何学を代数に従わせることを望み、生物学を化学に従わせることを望むのは、やはり唯物論であるからです。以上は、コントに見出される思想の一例ですが、何処にも無いものです。（完）

（1）フェルマ（一六〇一～六五）やロベルヴァル（一六〇二～七五）は、いずれもデカルトやパスカルの時代の数学者たち。

（2）メヌ・ド・ビラン（一七六六～一八二四）は、内省的方法で主意主義を主張した哲学者。

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

### 北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

### 金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。

二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。「ジュリアを讃えて」の詩は日本での処女作である。

### 高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。

日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

### 神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのプー）に、随想集『アランと共に（I・II）』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ（I～V）』『文明国の戦争で真の原因になるもの（上・下）』『神々（上・下）』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと（上・中・下）』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### 中平 耀（なかひら よう）

一九三〇年生まれ、群馬県出身。詩集『吊るされた鳥』（思潮社・一九六一年）、『時の中の橋』（詩学社・一九七三年）、『樹・異界』（神無書房・一九八一年）、『花についての十五篇』（花神社・一九八六年）、『滑稽譚』（花神社・一九九二年）、『木』（花神社・一九九七年）。訳詩『マンデリシュタームの詩』（集英社『世界の文学15・ロシアIII』・一九九〇年）、詩評論『マンデリシュターム読本』（群像社・二〇〇二年）。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

### なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつ

ら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺  
二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努  
力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『  
永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達  
した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半に  
かけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、  
一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄  
高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニ  
アス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。  
帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一六年  
は京都での作品発表を予定している。

（以上）

## 読者からのコメント

---

————— (10月版) —————

アラン『わが思索の後』(二十七) デカルト： デカルトのことは、「我思うゆえに我あり」と言った哲学者と聞いていました。魂は信じやすいものを信じて死ぬ。自由を愛する。人は全てを拒否すると全てを手に入れる。悪魔を祓うと真の神が現れる。神をすべてと信じた。「不安の状況が毎日勇気を望んでいる」とは、現在の私たちの生活を言っているような気がしました。

詩人・作詞家・西條八十： 西條八十は、新民謡・童謡・歌謡曲・戦時歌謡・純粹詩など心に残る歌ばかり 沢山創られたんですね。流行り歌をみんなで歌った時代を懐かしく思い出しています。純粹詩も読んでみたいと思います。

三浦逸雄の世界(十一の二)： 郊外の家がさみしく感じました。

三浦逸雄の世界(十一の一)： 静かな林が夕日に染まって、今日の一日が穏やかに暮れてゆくのを感じました。

雑誌の座談会から(一)： 広瀬中佐のことはよく知りませんが、叔父が(轟くつつおととびくる弾丸)とよく歌っていたのを覚えています。清水の次郎長、『時間と空間』の同人でいらした荒木先生、川上総領事夫人、佐々木信綱などなど、雲の上の人々のことを楽しく拝読いたしました。「ありがたし今日の一日もわが命めぐみたまへり天と地と人と」は好きです。

バレリーナ： 美しく軽やかに舞い踊るバレリーナたち。どうしたのでしょうか。観客にも分かるような呼吸の合わない一人がいたなんて。

御岳溪谷： 故郷を思い異国の山里を歩きながら、川の流れに自身を重ねておられるのでしょうか。天空の恵みを受け溪谷を散策する清々しさが伝わってきました。

二ヶ国を同時に旅する子供たち(修学旅行を引率して)： 韓日両国を、同時に旅した未来の主役の子供たち。過去を学び乗り越えて、平和な世界を築いていかれますようお祈り致します。

ウサギとカメ： 「ドジでノロマなカメ」の私は、いつまでたっても みめ麗しい兎さんには、どうしても追いつけないのです。あきらめているのは、夢がないからでしょうか？

愛を知る人へ： 色々な愛があるのですね。私は夫に援けてもらっていて、なくてはならない間柄になっています。

久賀島キリシタン： キリシタン弾圧の恐ろしい拷問にも負けず、純粹に教えに従い、抵抗することなく死を受け入れ、信仰心を捨てなかった人々のことを初めて知りました。

(以上)



同人誌 風狂 (ふうきょう)

第28号 (2016年11月登録)

<http://p.booklog.jp/book/110915>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110915>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト